

アボリショニズム研究： 太平洋戦争とオーシャン島のリン鉱石

徳島 達朗

〈Contents〉

Preface

- I The Pacific Ocean: Redivision by Powerful Countries
- II Phosphate, “Resources in South-Sea”
- III World War 2 and phosphate
- IV Web information on Ocean Island
- V The Story of Kabunare (translation)

Reference

.....

Summary

This research forms a part of study of abolitionism. Abolitionism is a thought and movement to reject slavery. Abolition movement had been continued in the Atlantic Slave Trade and the Pacific-Ocean Slave Trade, ‘Blackbirding’.

In the later part of 19th century European Powerful countries (Britain, France, and Germany) had made their colony settlements in Oceania. After World War 1, Japan had joined the struggle for revision of settlements.

In 1900, phosphate was discovered, Nauru and Banaba has been attracted attention by well stocked them. British Phosphate Commission (Britain, Australia, and New Zealand) has

managed the phosphate mining business.

When World War 2 began, Japan Imperialism had taken Nauru and Banaba by aggression.

NANTAKU (South-Sea Trustee Company) had charged of phosphate mining.

After been defeated, before their evacuation Japanese Navy slaughtered 140 natives. That criminal massacre has not been written in the History of Japanese Navy.

.....

まえがき

前著『アポリショニズム研究—「過去と向き合う」：強制連行・奴隷制—』（梓出版社2002年）において、大西洋奴隷貿易・奴隷制度の廃止後の状況下、新たに太平洋に展開する奴隷貿易（ブラックバーディング）の実態を論じた。これはペルー、チンチャ島のグアノ（海鳥の糞の堆積したもので窒素とリンを含む肥料として有用）採掘が主な舞台であった。

本稿もアポリショニズム（反奴隷制運動・思想）の範囲の思考を基礎とするものであるが、グアノから太平洋のリン鉱石へつながる時空を追うことにする。1900年に、偶然太平洋ミクロネシアの環礁地域で良質なリン鉱石が発見され、肥料用として産業化された。この地域には欧米列強（イギリス、フランス、ドイツ）ばかりでなく日本も参入し、リン鉱石採掘をめぐる葛藤も生じた。労働力として島嶼地域の多数の島民および中国人が動員されたが、太平洋戦争の際、オーシャン島では終戦直後、日本海軍による島民の大量虐殺あった。本稿では、リン鉱石の宝庫といわれたナウルとオーシャン島（バナバ）を中心に考察する。

前著までで、強制された「人の移動」について、大西洋奴隷貿易、太平洋奴隷貿易（ブラックバーディング）を論じたが、今回は日本による「強制労働」「強制移動」「戦争・略奪・虐殺」について、これまでわれわれの目にあまり見えていない事実を紹介したい。

I 太平洋：列強による再分割

周知のように、レーニン『帝国主義論』の第6章「列強のあいだでの世界の分割」の冒頭部分で、A. ズーパンが、『ヨーロッパの植民地の領土的発展』（1906年）において、「この時期の特徴は、アフリカとポリネシアの分割にある」（表1）と論じていることに関連させて、以下のように論じている。「しかし、アジアでもアフリカでも占取されていない土地、すなわちどの国家にも属さない土地はないのだから、ズーパンの結論を拡張して、つぎのように言うべきである。検討している時期の特徴は、地球の最終的分割にあり、最終的と言うのは、再分割が不可能であるという意味ではなく一反対に再分割は可能であり、しかも不可逆的である一、資本主義諸国の植民地政策がこの惑星上の占取されていない土地の占拠を完了したという意味である。世界ははじめて分割されつくしたのであり、したがってこの先は再分割だけが、すなわちある「領有者」から他の「領有者」への移行だけがおこるのであり、所有者なき状態から「所有者」への移行がおこるのではない。」（レーニン『帝国主義論』）

このように、太平洋島嶼地域は欧米列強と日本のいわゆる「草刈場」のような状態に陥ったのである。

表1 ヨーロッパの植民地列強（合衆国を含む）に属する土地面積のパーセント

地 域	1876年	1900年	増 加 率
アフリカに	10.8%	90.4%	+79.6%
ポリネシアに	56.8%	98.9%	+42.1%
アジアに	51.5%	56.6%	+ 5.1%
オーストラリアに	100.0%	100.0%	—
アメリカに	27.5%	27.2%	- 0.3%

（レーニン・聴涛弘訳『帝国主義論』新日本出版社124ページ）

(1) 佐藤幸男氏は「近代世界システムと太平洋」を以下のように論ずる（佐藤幸男1998年，16～17ページ）。

*近代世界システムの歴史的展開と太平洋島嶼国・地域の世界経済社会文化

も無縁ではない。

- * 太平洋島嶼世界は「多国間植民地」の典型であった。
 - * 脱植民地化の過程では、西欧的な国民国家システムが強要された。
 - * 太平洋島嶼国家は世界経済のもとでの不均等発展を運命づけられた。
- (2) カリブ海の近代世界システム周辺部への組み入れとの対比で、太平洋島嶼・地域を次のように論ずる。
- * カリブ海と比較して、世界経済の中心部から遠く離れ、島嶼諸国・非独立地域間の距離が大きい。南太平洋地域の植民地化は19世紀半ば以降に、土着の社会構造を温存するかたちで浸透していった。
 - * 第一次産品輸出の経済構造は共通だが、太平洋の場合は生産構造がいまなお村落共同体組織や土着的統治形態が温存され、資本主義経済の浸透した近代的セクターとの「二重構造」を形成した。
- (3) かくして世界システム周辺部の最底部に位置づけられた太平洋島嶼国・地域の経済的構造の特徴は次のようになる。
- * 経済的自立の困難性が大きい。
 - * 島嶼民は出稼ぎや移民による現金収入と送金という手段で世界システムに接近せざるを得ない。
 - * 旧宗主国を中心とした財政援助によって、世界システムにとどまることができる島嶼国経済ができあがる。

II 「南洋の資源」としてのリン鉱石

国策会社南洋拓殖株式会社（昭和11年、1936年設立）に従事した人々がまとめた『南拓誌』（昭和57年、14～16ページ）によれば、戦前日本の「南洋群島の沿革」は次のように記されている。

(1) スペイン時代

南洋群島（ミクロネシア諸島）が世に知られたのは、1521年、スペインの探検船のマゼランによるグアム島及びロタ島の発見に始まり、スペインはその後探検船を送り、マーシャル及びカロリンの諸島を発見、占領するに至った。しかし、スペインの活動は島民に対する宗教的伝道に主力を注ぎ、そ

の他の面はほとんど放置された。

(2) 分割時代

1880年代に入り，西部太平洋方面に列強とくに英，独の進出の結果，スペインはマリアナ及びカロリン群島を辛うじて保持するに止まり，マーシャル群島は独領に，ギルバート諸島は英領にと三分割された。

さらに，1898年(明治31年)，米西戦争の結果，フィリピンとグアム島は米国に，残余のマリアナ群島とカロリン群島は2500万ペセタ（1675マルク）でドイツに買収されて，スペインはついに姿を消した。

(3) ドイツ領時代

ドイツは1899年以来，領有のミクロネシア諸島全域の施政に意を注ぎ，スペイン人宣教師全員の退去を求め，これをドイツ人に代えた。また島々に椰子の栽植，コプラの生産を奨励し，1909年には，アンガウル島のリン鉱採掘に着手し，1912年に6万トン，1913年には9万トンを輸出し，群島内の資源開発に努力した。

(4) 日本委任統治時代

1914年(大正3年)，第一次世界大戦において独領南洋群島は，日本海軍に

表2 1938（昭和13）年のリン鉱石産出高①

リン鉱（単位1000トン）

蘭印26,	英領馬來162,	仏印43,	[南洋計231]
-------	----------	-------	----------

(野田勝久『南方方面海軍資料』，24ページ)。

表3 リン鉱石産出高②

島名(現国名)	面積(平方km)	産出量(トン)
ナウル(現ナウル共和国)	21	3463万*
オーシャン(バナバ)(キリバス共和国)	6.3	
マカテア(仏領ポリネシア)	21	950万
アンガウル(パラオ共和国)	8	410万
ファイス(ミクロネシア連邦)	2.8	73万**
エボン(マーシャル諸島共和国)	5.7	7万**
ソンソル(パラオ共和国)	1.9	6万**

注：*は1967年までの産出量

**は推定埋蔵量(戦争により枯渇前に生産中止)

(小川和美1998年，4ページ)。

占領された。1919年、パリ講和会議の結果、赤道以北は日本領となり、新たに国際連盟が創立されるや、日本の委任統治領として1945年（昭和20年）8月までその統治は続いたのである。

III 太平洋戦争とリン鉱石

(1) ナウル島の場合（『南拓誌』150～153ページ）

ナウル島は、東経160度56分8，南緯0度26分3，ほとんど赤道直下にあり、島の面積約20平方キロメートル、人口約7000名の火山岩を中心とする珊瑚礁の小島である。1886年にドイツの領土となった。1907年、英国系の太平洋リン鉱会社に買収され、第一次世界大戦後、豪州、ニュージーランドならびに英国の三国共同委任統治領となった。昭和17年5月23日、ナウルは日本海軍陸戦隊によって占領された。ナウルの鉱石は、当時、埋蔵量約1億トンと称され、今後100年間のわが国のリン酸肥料を賄うことができるといわれた。

南拓はアンガウル島リン鉱採掘の経験を有していたため、ナウル島リン鉱事業の管理と経営を政府から命ぜられた（オーシャン島は南洋開発株式会社が担当）。

(2) オーシャン島の場合

- * オーシャン島（バナバ）が初めて白人に発見されたのは、1801年であるが、ヨーロッパは当初その経済的価値を認めていなかったが、1900年にリン鉱石が発見され変貌をとげた（小川和美「バナバの人々」30～32ページ）。
- * リン鉱石の鉱脈を発見した太平洋諸島会社（Pacific Island Company）がイギリス政府に働きかけた結果、イギリスは1901年に保護領とし、1916年にはギルバート・エリス諸島（現在のキリバスとツバル）とあわせて植民地とした。
- * バナバは急速に貨幣経済に巻き込まれ、農地や果樹園はリン鉱石採掘地となった。貨幣が生活に不可欠となり、島民は賃金労働者となった。採掘が進み土地の不足が深刻化した。現場での労働力の主力は中国人とギルバー

ト諸島からの出稼ぎ者であった。

- * 太平洋戦争が始まると、日本軍が同島を占領した。食糧の自給が困難な小さな島に住民と大量の兵隊が共存することは困難である。日本軍は住民を周辺の島に強制移動させた。最終的には200人程のギルバート人を残し、それ以外のギルバート諸島人、バナバ人はタラワ、コスラエ、ナウルなどに強制移住させられた。1945年8月敗戦を迎えるが、残留日本軍は連合軍の上陸前に、ギルバート人全員を射殺した（奇跡的に1名生存）。

(3) リン鉱石とBPC (British Phosphate Commission) (小川和美1998年, 2ページ)

- * 有人島でのリン鉱石の発見は、世紀の変わり目、1899年であった。欧米列強はこの頃までに太平洋の島々の分割を完了し、一部ではココヤシ、砂糖、パイナップルのプランテーションが開発され始めた。グアノ採掘事業に従事していたアランデルは、コブラと真珠の取引を手がけていた太平洋諸島会社 (Pacific Islands Co.Ltd) に権益と資産を譲渡し、自分は同社の副社長に就任した。1899年、同社のシドニー事務所で、地質の専門家、アルバート・エリス (Albert Ellis) が偶然に事務所のドアの前に置かれていた石に注目し、鑑定の結果それがリン鉱石であることが判明した。エリスらはナウル島と形状が酷似しているバナバ島に眼をつけた。そして豊富なリン鉱石が存在することを確認し、島民代表から99年間の採掘権を手に入れた。当時バナバ島は1886年のドイツとの協定でイギリス圏とされていたが、正式に施政権下に置く手続きが未了であった。イギリス政府は同社の要請によりただちに植民地編入の手続きを取り、1900年4月にバナバ島のリン鉱石採掘権を同社に与えた。1902年、同社は他の事業から撤退し、事業をリン鉱石業一本に絞ることになり、太平洋リン鉱会社 (P P C) へと改組した。P P Cはバナバ島の三倍の面積でリン鉱石を豊富に埋蔵するナウルに注目していたが、当時はドイツの支配下にあった。交渉の結果、ナウルのリン鉱石は英独合弁企業として営まれるが、第一次世界大戦でのドイツの敗北は、太平洋のドイツの諸権益を再分割する結果をもたらした。1917年以降、P P Cは純然たるイギリス企業となった。イギリスリン鉱石委員

会（B P C / British Phosphate Commission）が発足し，B P Cはイギリス，オーストラリア，ニュージーランド三国により管理された（小川和美1998年）。

- * B P Cはイギリス，オーストラリア，ニュージーランド三国の弁務官により構成され，三国の利益のために安価にリン鉱石を供給する国策会社であった。B P Cへの出資比率はイギリス42%，オーストラリア42%，ニュージーランド16%であった。リン鉱石の販売価格は生産価格とされ，国際市場よりはるかに安い価格で，ナウル島，バナバ島のリン鉱石を三国に輸出した。リン鉱石を精製した肥料は，ニュージーランドとオーストラリアの農業開発に重要な役割を果たした。
- * 太平洋戦争が始まると，ナウル，バナバ両島は日本軍に占領された。日本もリン鉱石採掘を目指し，ナウル島に南洋拓殖株式会社，バナバ島に南洋興発株式会社の職員を送り込んだが，戦局の悪化により一度も輸送船を送ることができなかった。

(4) オーシャン島の日本海軍（西野照太郎1986年，8～21ページ）

西野照太郎氏によると，連合軍の上陸を見ずに終戦を迎えたナウル，オーシャン島について日本軍の戦史が空白になっているという。しかし，前述のように，ギルバート人の虐殺があったのである。西野氏はサー・アルバート・エリス著『中部太平洋の前哨点』（Sir Albert Ellis, "Mid-Pacific Outposts" Auckland, Brown and Stewart Ltd., 1946）を抄訳し情報を提供している。

エリスは政府代表として，ナウルとオーシャン島で行われる日本軍降伏式典に出席している。ナウルとオーシャン島のリン鉱業の生みの親として，日本軍守備隊の降伏式よりも，両島のB P Cの生産施設の被害状態を確認したいという使命感を持っていたようである。

ナウルもオーシャン島も1942年8月に，日本海軍陸戦隊に占領されたが，ナウルの日本軍占領下の人口は以下のとおりである。

表4 ナウルの人口

	1943年6月	1944年5月
日本海軍陸戦隊	1388	2867
南洋拓殖職員	72	0
日本人労働者*	1500	1311
ヨーロッパ人	2	0
華僑	184	179
①ナウル人	1848	
②その他太平洋諸島民	193	①+②1463
合計	5187	5820

*朝鮮人労働者を含む
 (西野照太郎1986年より)
 太平洋戦争直前の人口について、ナウルは1941年まで発表されているが、オーシャン島は1936年の人口しか明らかでない。

表5 オーシャン島およびナウルの人人口

	オーシャン島1936年	ナウル1941年
原住民*	621	1827
ギルバート島民**	1156	193
ヨーロッパ人	134	68
華僑	880	1429
合計	2791	3517

*オーシャン島はバナバン、ナウルはナウリ人。
 **エリス諸島民などギルバート諸島民以外の労働者を含む。
 (西野照太郎1986年より)

オーシャン島については、日本軍占領下の人口は明らかにされていない。当時のオーシャン島には約700人のバナバンと、約800人のギルバート諸島民がいたとされる。日本軍は1943年初頭からすべてのバナバンを島外に送り出したが、その直接の動機は早魃による食糧不足対策とされている。しかし、単に食料欠乏のための対策として人口を減らす措置が必要があったのであれば、なぜ日本軍の使役あるいは「兵補」として、160人前後を残した場合に、島の事情にくわしいバナバンを選ばずに、ギルバート・エリス諸島民を選んだのか。日本軍はリン鉱石資源を採掘し、日本に供給する目的で、ナウルと

オーシャン島を占領したのであるから、オーシャン島の鉱区所有者であるバナバンを追い出した方が有利であるとする身勝手な配慮があったと西野氏は考えている。

- * オーシャン島守備隊長（鈴木直臣少佐）は、連合軍上陸前に島民が反乱を企てたことにして全員を処刑するが、奇跡的にカブナレ (KABUNARE) という島民が生命をとりとめ事態（反乱を企てた事実はなく、大量虐殺であったこと）が判明する。1945年10月1日のオーシャン島降伏式に、エリスは出席したのであるが、降伏文書調印式では日本海軍守備隊の司令、鈴木直臣少佐が降伏文書に署名し（奈良賀男主計大尉、坂田二郎大尉が同席）オーストラリア軍のステューブソン准将に提出した。
- * オーシャン島事件は公刊戦史にも記されていないとのことで、不明な部分があるが、最近、上記降伏文書調印式に同席していた奈良賀男氏（当時、主計大尉）が旧日本海軍指導部の立場で発言している（奈良賀男1987年）。

IV オーシャン島に関する Web 情報

- (1) アンソニー・フルード Anthony Flude (<http://homepages.ihug.co.nz/~tonyf/ocean/ocean.html>) は、新たにオーシャン島とリン鉱石に関する論文をウェブ上に公開した (*Ocean Island A rocky land of hidden treasure*)。それは小生が太平洋のブラック・バーディングの継続としてミクロネシアのリン鉱石と労働力調達に関心を向けたことに応えて旧稿を急遽 Web に乗せたものであると小生宛のメールで記している。
 - * Web 上で、フルード Flude は日本軍に関して以下のように記している。「オーシャン島は第二次世界中、日本帝国軍隊に占領されたが、多数のバナバ人が射殺され、家族から切り離され、日本人がこしらえたカロリン諸島やコシャエ (Kusaie) の収容所へ送られた。B P Cの三隻のリン鉱石運搬船は沈没させられた。オーシャン島へのアメリカの猛爆で採掘施設のほとんどは破壊され稼動不能となった。戦争の末期の1945年に、オーストラリアは同島を再占領したが、バナバ人の故郷、家屋は完全に破壊されていた。」
- (2) 日本海軍の島民虐殺に関して、最近視野に入った Web がある。ナウル、

オーシャン島のリン鉱石採掘，第二次世界大戦と島民虐殺の情報が展開されている (<http://www.janeresture.com>)。

- * しかもこの Web を展開している人 (Dame Jane Resture, Ph. D.) の伯父 (Falailiva, Tuvalu 出身) は，上記島民虐殺の唯一の生存者カブナレ (Kabunare, Nikunau 出身) と並んで後ろ手に縛られ崖の上で撃ち殺された人である。死の直前，二人は言葉を交わしているのである。Jane Resture の了解を得たので以下翻訳紹介する。これはカブナレのパプア・ニューギニア・ラバウルでの戦争犯罪裁判での証言である。鈴木直臣少佐は最高責任者として死刑 (絞首刑) に処せられた。奈良賀男主計大尉は，当初死刑を求刑されたが，鈴木直臣少佐の嘆願が入れられ25年の禁固刑の判決を受けた。

V 【翻訳】「カブナレの体験談」

The Story of Kabunare (<http://www.janeresture.com/banaba/kabunare.htm>)

- * 私の名前はカブナレでニクナウ島 Nikunau Island の出身です。日本軍のバナバ占領以前に，B P C の募集に応じて来島し，ケーブルウェイの仕事に従事していました。
- * 日本軍がやってきた後，漁師の仕事を命じられタブウェワ村 Tabwewa Village に住みました。戦争が終わる五ヶ月ぐらい前に，私はウマ村 Uma Village に移され，そこで漁猟係りに加えられました。
- * ある朝，オサキソ Osakiso が，B P C のビリヤード室の前に集まるようにと言いました。百名ぐらいがそこにいました。そこでわれわれは戦争が終わったが，しばらくは働かねばならないこと，ジャップ (日本軍) は島を離れ，われわれはバナバに放置されるだろということだった。
- * 翌日，われわれは新たにグループ分けされた。私は第5セクションで8名であった。それからエタニ Etani の警備隊へ向かって歩かされた。
- * (これはカブナレの話のほんの一部であるが，以下は彼が語ったことを正確に記したものである。Jane Resture)

-
- * 私たちが警備隊に到着すると、それぞれの部署に大勢のジャップの兵隊たちがいました。彼らは全員屋内にいました。係りのジャップの兵士は東の方に向かって並んで座るように命じました。それから彼はポケットから小さなノートを取り出し、私たち一人一人に何歳かと尋ねました。私たちが何歳か答えると、その兵士はノートに記入しました。私たちが尋ねられたのはそれだけでした。
 - * その兵士が年齢を書き終わると、SHOTAIISO(小隊長のことであろう＝徳島) が他のもう1人の兵士を伴って私たちの前に出てきました。SHOTAIISO は剣を抜き拳銃を構え、その兵士も銃剣を構え、私たちに狙いを定めました。彼らは私たちには何も言わなかったが、さらに他の兵隊たちに出てくるように叫んでいました。八人の兵隊が銃を持って出てき着剣しました。そして私たちの前に立ちました。兵士はそれぞれ私たち1人一人の前に立ち銃剣を6インチぐらい離して腹の前に構えました。
 - * 無言のまま、兵士は私たちを立ち上がらせ、ポケットから紐を取り出し私たちの手を縛りました。それはロープを作るのに使われる麻毛でした。私の手は固く縛られました。各人の手を縛ったあと少し紐は余っていました。SHOTAIISO は兵士に声をかけ、その兵士は私たちに立つように命じました。それから兵士はロープの端を集めて握りました。私たちは逃げ出すことはできませんでした。
 - * それから、私たちがタビアン村 Tabiang Village に向かって歩き始めると、SHOTAIISO は私たちの横を歩きました。SHOTAIISO と一緒だった拳銃を持った兵士は警備隊に残りました。私たちは SHOTAIISO が発電所の中の男たちと話している間、三分ぐらい発電室の横で止まっていた。彼らが何を話しているのかはわかりません。それから私たちは道を横切ってタビアン村の下の崖の方へ下っていきました。
 - * 崖に着くと、兵士は紐をゆるめて、崖の端に並んでうずくまるように命じました。それから私たちは布で目隠しされました。私たちの手を縛った同じ男が私たちの目隠しをしました。私は二番目に目隠しをされました。
 - * ファライリヴァ Falailiva (* Jane の注参照) は最初に目隠しされ、私の

左側にいました。彼は私に言いました。「覚悟はできていますか？」私は答えました。「はい、覚悟はできています。」それからファライリヴァは訊ねました。「神を信じますか？」私は答えました。「はい、信じます。」

- * それから、一瞬静かでした。その直後、私は崖から落ちました。そうしようとしたのではないのですが、落ちたのです。ほとんどその瞬間、叫び声を聞きました。そして、誰かが私の上に落ちてきました。私は、それはファライリヴァだと思いました。その他にも落ちる音を聞きましたが、叫び声はありませんでした。それから多数の銃声を聞きました。ファライリヴァはまだ私の上にはいました。そして私のすぐ近くにも弾丸の音がしました。
- * それは、午後3時か4時頃でした。海の水が私たちに打ち寄せてきますが、引き潮なので息はできました。私は目隠しをとおして左眼が少し見えましたが、上を見ることはできませんでした。それから、私はファライリヴァがまだ生きていのかどうかと思って、彼の肩を押してみました。彼はまだ私の上に横たわっています。ファライリヴァは声を出しません。彼は死んだのだとわかりました。
- * 私はジャップが行ってしまうまで、一時間ぐらい水の中にいました。それから起き上がり、手首の縛めを切るため鋭い岩の所へ行きました。それから目隠しをずらしました。それから、生きていないかと、すべての遺体を見ました。彼らは全員死んでいました。私は皆の顔を見ました。あたりにはおびただしい血が流れていました。私には皆がどのように殺されたかは言うことができません。ファライリヴァは左脇に傷があり、血が流れ出していました。ウエアンテイティ Ueanteiti は頭に弾丸で撃たれた穴がありました。全員が死んでいることがわかった後、私は隠れる場所を探しました。そして洞穴を見つけそこに隠れました。一晩中その洞穴にいました。
- * 翌朝、洞穴の外にいくつかの遺体が浮かんでいるのを見ました。遺体は膨れ上がっていました。二つの遺体が洞穴の入り口に流されてきました。私はそれらに触ることができませんでした。洞穴の中にじっとしていて外を窺っているだけでした。
- * お昼頃、低空で飛ぶ飛行機の爆音を聞きました。その飛行機が半時間か一時間ぐらい飛び回っているのを聞きました。私には飛行機は見えませんで

したし、洞穴の中にじっとしていました。

- * 飛行機が去った後、洞穴の上で足音が聞こえました。洞穴のうしろにある穴から声が聞こえました。それから、いくにんかのジャップの兵隊がリーフの上を歩いているのを見ました。潮が満ちてきて洞穴に入り始めました。いく人かの兵隊が私の洞穴の近くまで来ました。二人の兵士が遺体をひとつリーフの外へひっぱっていきました。そしてまたもどり、もう一つの遺体を深い水の方へ引いていきました。
- * 私の洞穴からすべて見えたわけではありませんが、彼らは他の遺体もそうしたと思います。私は二人のジャップが乗ったカヌーを二隻見ました。彼らは兵隊たちがリーフの外へ引いてきた遺体を引き上げていました。ランチ(大型ボート)も来ていました。カヌーとランチはタブウェワ Tabwewa の方からやって来ました。カヌーは海岸近くまで漕いで近寄り、ランチはややはなれてゆっくりと動いていました。カヌーは遺体をランチに運びました。それからカヌーはタブウェワの方へ漕いで戻っていきました。ランチは沖の方へ出て行きました。
- * その日の事は、ほかに何も覚えていません。その晩は、その洞穴で過ごしました。翌日は、線路の上を動くトロッコの音以外は覚えていません。
- * その日の夕方、7時か8時頃、私はココナッツの実を探すため、また陸上の隠れ場所を見つけるために、その洞穴を出ました。私が木にのぼっている時、二人の日本人がタブウェワの方へトロッコを引いてやって来ました。私は彼らが行ってしまうまで、木の上に隠れていました。それから、隠れる場所を探しにでかけ警備隊の上の方にバンガバンガ bangabanga (横穴)を見つけ、そこに隠れました。次の日の早朝でした。
- * 私は、12月2日に二人のギルバート人に出会うまで、この横穴に隠れていました。私は夜の間、食物、青いココナッツと熟したココナッツ、水を集めにでかけました。
- * 時々、私は大きなテタイの木にのぼりあたりを見回し、船がないか見ました。私は軍艦は見ませんでした。他の船は見ました。私はそれらはジャップの船だと思いました。
- * 私は警備隊の掲揚台にユニオン・ジャックの旗がはためいているのを見ま

した。しかし、私は他のジャップの計略と考え近づきませんでした。私は毎日ラッパの音を聞きましたが、私は、それもジャップとと思いました。というのは、ジャップもラッパを良く鳴らすからです。

*ある日、私がテタイの木にのぼっている時、日本とちがう自動車を見ました。乗っている人も日本人のようではありません。私は木から下りて、道路の脇に隠れました。その自動車が戻ってくるのを待ちました。

*私は二、三時間待ちましたが、その自動車は戻ってきませんでした。その時、ビンのチンチンという音を耳にしました。二人の男を見ましたが、一人はギルバート人と思いましたが、もう一人はジャップとと思いました。というのは、彼はジャップの服と靴をはいていたからです。一人はスル sulu を着てクジャクヤシのビンを運んでいるのはギルバート人でしょうギルバート語を話しているように思えました。

*彼らが通り過ぎた時、彼らはギルバート人に間違いないと確信しました。そこで私は黙って後についていきました。彼らの近くまで近寄って、彼らに挨拶しました。「カム・ナ・マウリ」‘Kam na mauri’（挨拶）。彼らは一瞬びっくりしたようでした。そしてどこから来たのかと訊ねました。私は彼らにずっとここにいたのだ、他の者は殺された、と話しました。私は「日本人はどこにいるのだ？」と訊ねました。彼らはジャップは皆行ってしまったこと、彼らは第二次の労働者募集で来たのだと話してくれました。彼らは私がずっとどこに隠れていたのかと訊ねたので、私は彼らにその場所を教えました。私は命を救ってくれた横穴に感謝し、警備隊に行きました。ティウオキ Teauoki が私を地方委員会 District Commissioner へ連れて行ってくれました。(1945年12月)

(* Jane の注：ファライリヴァ・レストゥアー Falailiva (Fly River) Resture はジェーン・レストゥアーの父ロバート Robert の兄である。)

.....
(2002年 8 月30日)

参考資料・Web 情報

*レーニン『帝国主義論』聴濤弘訳 新日本出版社 1999年

- * 佐藤幸男編『世界史のなかの太平洋』太平洋叢書—1 国際書院1998年
- * 『南拓誌』南拓会 昭和57年
- * 野田勝久編・解説『南方方面海軍資料』十五年戦争極秘資料集補巻15 不二出版 2001年
- * 小川和美「バナバの人々」『ミクロネシア』87号
- * 小川和美「太平洋島嶼地域におけるリン鉱石採掘事業の歴史と現在」日本女子大学史学研究会『史艸』39号 1998年11月
- * 西野照太郎「オーシャン島の日本海軍—太平洋戦争の知られざる一断面—」『太平洋学会誌』第31号 1986年7月
- * 奈良賀男「われらポツダム戦争を戦えり—オーシャン島の日本海軍—」『太平洋学会誌』第36号 1987年10月
- * Anthony G. Flude, *Ocean Island A rocky land of hidden treasure* 2002
(<http://homepages.ihug.co.nz/~tonyf/ocean/ocean.html>)
- * Jane Resture, *Nauru—A Short History* Rev.26th May 2002
(<http://www.janeresture.com/nauru-history/index.htm>)
- * Jane Resture, *The Story of Kabunare* Rev.26th June 2002
(<http://www.janeresture.com/banaba/kabunare.htm>)
- * Jane Resture, *Banaba—World War 2* Rev.18th April 2002
(<http://www.janeresture.com/banaba/ww2.htm>)